

小爆発二件

寺田寅彦

青空文庫

昭和十年八月四日の朝、
信州しんしゅう 軽井沢かるいざわ千が滝たきグリーンホテ
ルの三階の食堂で朝食を食つて、それからあの見晴らしのいい露
台に出てゆっくり休息するつもりで煙草たばこに点火したとたんにな
んだかけたたましい爆音が聞こえた。「ドカン、ドカドカ、ドカ
ーン」といったような不規則なリズムを刻んだ爆音がわずか二三
秒間に完了して、そのあとに「ゴー」とちやうど雷鳴の反響のよ
うな余韻が二三秒ぐらい続き次第に減衰しながら南の山すそのほ
うに消えて行つた。大砲の音やガス容器の爆発の音などとは全く
ちがった種類の音で、しいて似よつた音をさがせば、「はっぱ」
すなわちダイナマイトで岩山を破砕する音がそれである。「ドカ

ーン」といふかな文字で現わされるような爆音の中に、もつと鋭い、どぎつい、「ガー」とか「ギヤー」とかいったような、たとえばシャヴェルで敷居の面を引っかくようなそういう感じの音がまじっていた。それがなんだかどなりつけるかまたしかり飛ばしてもするような強烈なアクセントで天地に鳴り響いたのであつた。

やっぱり浅間あさまが爆発したのだろうと思つてすぐにホテルの西側の屋上露台へ出て浅間のほうをながめたがあいにく山頂には密雲のヴェールがひっつかかつていて何も見えない。しかし山頂から視角にしてほぼ十度ぐらいから以上の空はよく晴れていたから、今に噴煙の頭が出現するだろうと思つてしばらく注意して見守つてみると、まもなく特徴ある花コリーフラワー甘藍形の噴煙の円頂が山をおお

う雲帽の上にもくもくと沸き上がって、それが見る見る威勢よく直上して行った。上昇速度は目測の結果からあとで推算したところでは毎秒五六十メートル、すなわち台風で観測される最大速度と同程度のものであったらしい。

煙の柱の外側の膚はコーリフラワー形に細かい凹凸おうとつを刻まれていて内部の擾乱渦動じょうらんかどうの劇烈なことを示している。そうして、

従来見た火山の噴煙と比べて著しい特徴と思われたのは噴煙の色がただの黒灰色でなくて、その上はかなり顕著なたとえば煉瓦れんがの色のような赤褐せきかつしよく色を帯びていることであつた。

高く上がるにつれて頂上の部分のコーリフラワー形の粒立った凹凸が減じて行くのは、上昇速度の減少につれて擾乱渦動の衰え

ることを示すと思われた。同時に煙の色が白っぽくなつて形も普通の積乱雲の頂部に似て来た、そうしてたとえば椎^{しいたけ}蕈^{たけ}の笠^{かさ}を何枚か積み重ねたような格好をしていて、その笠の縁が特に白く、その裏のまくれ込んだ内側が暗灰色にくま取られている。これは明らかに噴煙の頭に大きな渦^{ヴォーテックスリング}環^{リング}が重畳していることを示すと思われた。

仰角から推算して高さ七八キロメートルまでのぼつたと思われるところから頂部の煙が東南になびいて、ちやうど自分たちの頭上の方に流れて来た。

ホテルの帳場で勘定をすませて玄関へ出て見たら灰が降り初めていた。爆発から約十五分ぐらいたったころであつたと思う。ふ

もとのほうから迎いに来た自動車の前面のガラス窓に降灰がまばらな^{かすりもよう}縞模様を描いていた。

山をおりる途中で出会った土方らの中には目にはいった灰を片手でこすりながら歩いているのもあつた。荷車を引いた馬が異常に低く首をたれて歩いているように見えた。避暑客の往来も全く絶えていたようであつた。

^{ほしのおんせん}星野温泉へ着いて見ると地面はもう相当色が変わるくらい灰が降り積もっている。草原の上に干してあつた^{かっぱ}合羽の上には約一ミリか二ミリの厚さに積もっていた。

庭の^{ひば}檜葉の手入れをしていた植木屋たちはしかし平気で何事も起こっていないような顔をして仕事を続けていた。

池の水がいつもとちがって白っぽく濁っている、その表面に小雨でも降っているかのように細かい波紋が現滅していた。

こんな微量な降灰で空も別に暗いというほどでもないのであるが、しかしいつもの雨ではなくて灰が降っているのだという意識が、周囲の見慣れた景色を一種不思議な せりりよう 凄涼 ふんいき の雰囲気 ふんいき で色どるように思われた。宿屋も別荘もしんとして静まり返っているような気がした。

八時半ごろ、すなわち爆発から約一時間後にはもう降灰は完全にやんでいた。九時ごろに出て空を仰いで見たら黒い噴煙の流れはもう見られないで、そのかわりに青白い煙草 たばこ の薄けむりのようなものが浅間のほうから東南の空に向かってゆるやかに流れて行

くのが見えた。最初の爆発にはあんなに多量の水蒸気を噴出したのが、一時間半後にはもうあまり水蒸気を含まない硫煙のようなものを噴出しているという事実が自分にはひどく不思議に思われた。この事実から考えると最初に出るあの多量の水蒸気は主として火口の表層に含まれていた水から生じたもので、爆発の原動力をなしたと思われる深層からのガスは案外水分の少ないものではないかという疑いが起こった。しかしこれはもっとよく研究してみなければほんとうの事はわからない。

降灰をそつとピンセットの先でしゃくい上げて二十倍の双眼顕微鏡でのぞいて見ると、その一粒一粒の心核には多稜形たりのうけいの岩片があつて、その表面には微細な灰粒がたとえば杉すぎの葉のよ

うに、あるいはまた霧氷のような形に付着している。それがちよつとつま楊枝ようじの先でさわつてもすぐこぼれ落ちるほど柔らかい海綿状の集塊となつて心核の表面に付着し被覆しているのである。ただの灰の塊かたまりが降るとばかり思っていた自分にはこの事実が珍しく不思議に思われた。灰の微粒と心核の石粒とでは周囲の氣流に對する落下速度が著しくちがうから、この両者は空中でたびたび衝突するであろうが、それが再び反発しないでそのまま膠こうちやく着してこんな形に生長するためには何かそれだけの機巧がなければならぬ。

その機巧としては物理的また化学的にいろいろな可能性が考えられるのであるが、それもほんとうのことはいろいろ実験的研究

を重ねた上でなければわからない将来の問題であろうと思われた。

一度浅間あさまの爆発を実見したいと思つていた念願がこれで偶然に遂げられたわけである。浅間観測所の水みなかみ上み理学士に聞いたところでは、この日の爆発は四月二十日はつかの大爆発以来起こつた多数の小爆発の中でその強度の等級にしてまず十番目くらいのものである。そのくらいの小爆発であつたせいでもあるが、自分のこの現象に対する感じはむしろ単純な機械的なものであつて神秘的とか驚異的とかいつた気持ちは割合に少なかつた。人間が爆発物で岩山を破壊しているあの仕事の少し大仕掛けのものだといふような印象であつた。しかし、これは火口から七キロメートルを隔てた安全地帯から見たからのことであつて、万一火口の近く

にでもいたら直径一メートルもあるようなまっかに焼けた石が落下して来て数分時間内に生命をうしなつたことは確實であろう。

十時過ぎの汽車で帰京しようとして沓掛くっかけ駅で待ち合わせてい

たら、今浅間からおりて来たらしい学生をつかまえて駅員が爆発

当時の模様を聞き取っていた。爆発当時その学生はもう小浅間こあさまの

ふもとまでおりていたからなんのことはなかつたそうである。そ

の特別に四人連れの登山者が登山道を上りかけていたが、爆発し

ても平気でのぼって行ったそうである。「なになんでもないです

よ、大丈夫ですよ」と学生がさも請け合つたように言つたのに対

して、駅員は急におごそかな表情をして、静かに首を左右にふり

ながら「いや、そうでないです、そうでないです。——いやどう

もありがとう」と言いながら何か書き留めていた手帳をかくしに収めた。

ものをこわがらな過ぎたり、こわがり過ぎたりするのはやさしいが、正当にこわがることはなかなかむつかしいことだと思われる。○○の○○○○に對するのでも△△の△△△△に對するのでも、やはりそんな気がする。

八月十七日の午後五時半ごろにまた爆発があつた。その時自分は星野温泉別館ほしのおんせんの南向きのベランダで顕微鏡をのぞいていたが、爆音も気づかず、また気波も感じなかつた。しかし本館のほうにいた水みなかみ上理学士は障子にあたって揺れる気波を感知したそうで

ある。また自分たちの家の裏の丘上の別荘にいた人は爆音を聞き、そのあとで岩のくずれ落ちるような物すごい物音がしばらく持続して鳴り響くのを聞いたそうである。あいにく山が雲で隠れていて星野のほうからは噴煙は見えなかったし、降灰も認められなかった。

翌日の東京新聞で見ると、四月二十日はつか以来の最大の爆発で噴煙が六里の高さにのぼったとあるが、これは信じられない。素人しろうとのゴシップをそのままに伝えたいいつもの新聞のうそであろう。この日の降灰は風向の北がかったために御代田みよたや小諸方面こもろに降ったそうである、これは全く珍しいことであった。

当時北軽井沢きたかるいざわで目撃した人々の話では、噴煙がよく見え、岩

塊のふき上げられるのもいくつか認められまた煙柱をつづる放電現象も明瞭めいりょうに見られたそうである。爆音も相当に強く明瞭に聞かれ、その音の性質は自分が八月四日に千せんが滝たきで聞いたものとほぼ同種のものであったらしい。噴煙の達した高さは目撃者の仰角の記憶と山への距離とから判断してやはり約十キロメートル程度であったものと推算される。おもしろいことには、噴出の始まったところは火山の頂をおおっていた雲がまもなく消散して山頂がはつきり見えて来たそうである。偶然の一致かもしれないが爆発の影響とも考えられないことはない。今後注意すべき現象の一つであろう。

グリーンホテルではこの日の爆音は八月四日のに比べて比較に

ならぬほど弱くて気のつかかなかつた人も多かつたそうである。

火山の爆音の異常伝播いじょうでんぱについては大森博士おおもりの調査以来藤ふじわ

原ら博士の理論的研究をはじめとして内外学者の詳しい研究がいろいろあるが、しかし、こんなな火山に近い小区域で、こんなな音の強度に異同のあるのはむしろ意外に思われた。ここにも未来の学者に残された問題がありそうに思われる。

この日峰みねの茶屋ちやや近くで採集した降灰の標本というのを植物学者のK氏に見せてもらった。霧の中を降って来たそうで、みんなぐしよぐしよにぬれていた。そのせいか、八月四日の降灰のような特異な海綿状の灰の被覆物は見られなかつた。あるいは時によつて降灰の構造がちがうのかもしれないと思われた。

翌十八日午後峰の茶屋からグリーンホテルへおりる専用道路を歩いていたらきわめてかすかな灰が降って来た。降るのは見えな
いが時々目の中にはいつて刺激するので気がついた。子供の服の
白い襟にかすかな灰色の斑はんとん点を示すくらいのもので心核の石粒
などは見えなかった。

ひと口に降灰とは言っても降る時と場所とでこんなにいろいろ
の形態の変化を示すのである。軽井沢かるいざわ 一帯を一メートル以上の
厚さにおおっているあの豌豆大えんどうだいの軽石の粒も普通の記録ではや
はり降灰の一種と呼ばれるであらう。

毎回の爆発でも単にその全エネルギーに差等があるばかりでな
く、その爆発の型にもかなりいろいろな差別があるらしい。しか

しそれが新聞に限らず世人の言葉ではみんなただの「爆発」になつてしまふ。言葉というものは全く調法なものであるがまた一方から考えると実にたよりないものである。「人殺し」「心中」などでも同様である。

しかし、火山の爆発だけは、今にももう少し火山に関する研究が進んだら爆発の型と等級の分類ができて、きようのはA型第三級とかきのうのはB型第五級とかいう記載ができるようになる見込みがある。

S型三六号の心中やP型二四七号の人殺しが新聞で報ぜられる時代も来ないとは限らないが、その時代における「文学」がどんなものになるであろうかを想像することは困難である。

少なくとも現代の雑誌の「創作欄」を飾っているようなあたりの粗雑さを成立条件とする種類の文学はなくなるかもしれないという気がする。

(昭和十年十一月、文学)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第五卷」岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年11月20日第1刷発行

1963（昭和38）年6月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年9月5日第65刷発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第十卷」岩波書店

1961（昭和36）年7月7日第1刷発行

※「駅員は急におごそかな表情をして」の箇所は、底本では「駅員は急におごそかな表情をして」でしたが、親本を参照して直しました。

入力：(株)モモ

校正：多羅尾伴内

2003年11月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小爆発二件

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>